

遺跡からの警告

南海トラフ編(8) 正平地震

阿波の雪(徳島県美波町)の由岐地区)の湊に、にわかには大山のような潮が来て、1700余の家々がこごとく引き潮にさらわれた。人も牛馬も何一つ残らなかった。

巨大津波発生

震源域広く被害甚大

14世紀に成立したとされる「太平記」は、1361年7月26日の南海トラフ地震で阿波を襲った大津波をこつ伝える。南朝年号で「正平16年(北朝では康安元年)6月」のことだ。

徳島県南東部に位置する由岐は太平洋に面したリアス海岸で、波浪時の避難場所にもなる天然の良港。13世紀の「平家物語」にも「雪の浦」として登場し、太平洋ルートの物資集積地とし

②

(大阪市)で2万人余、全国で3万人余が亡くなったとされる。

奈良県斑鳩町の法隆寺で14世紀に書かれた「嘉元記(かげんき)」によると、

正平地震でも四天王寺(大阪市)近くの「安居殿(やすいどの)」付近まで津波が来たという。安居殿は、1615年の大坂夏の陣で

池(高知県土佐市)でも、1099年の康和南海地震が正平地震の可能性があると津波堆積物を見つけた。

「龍神池で津波堆積物の厚さや巻き込まれた石の大きさや比べると、正平地震の津波は宝永地震と同じくらいだったと考えられる。

大分県で津波が大きいことから、震源域が南海トラフの西側まで広がっていたのではないかと松岡准教授。産業技術総合研究所の調

献は残っていないが、美波町には正平地震の津波犠牲者を供養したと伝わる石碑(高さ1・6m、幅70cm)がある。

康暦2(1380)年の年号や約70人の名前があったことから、これらの人々が19年前の犠牲者を弔い、自分たちの後生を願って建立したと解釈されている。

また江戸時代末期の土佐藩の歴史書によると、高知空港(高知県南国市)近くにあった正興寺で「康安元年六月、大塩(大潮)で文書などが流された」といっ

一方は、宝永地震でも大津波で被害を受けた。このクラスの津波は、どのくらいの頻度で起きるのだろうか。

高知大はこれまでに、龍神池で過去約3500年間に正平地震や宝永地震を含めて少なくとも8回、大津波が到達したことを示す砂層を確認した。

高知大の岡村真特任教授(地質学)は「繰り返し間隔は、約550〜600年。正平地震も、宝永地震のような連動型地震だったのでないか。宝永地震から300年以上たった今、次への備えが急務だ」と警告した。



和歌山県串本町の橋杭岩。周辺にたくさんの津波石が打ち上げられている